



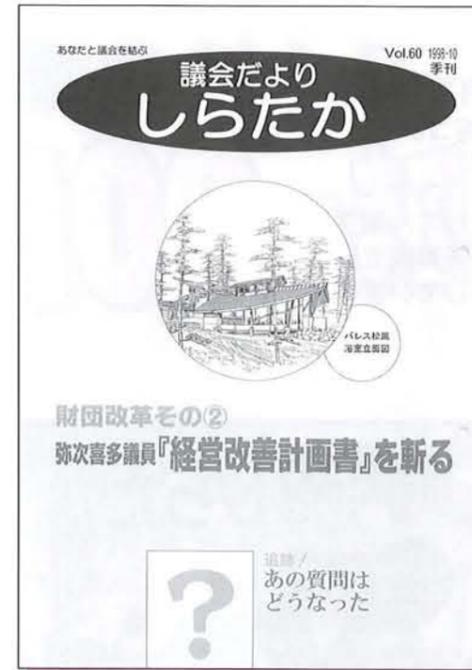
第80号 平成15年7月22日発行
第19回全国町村議会広報コンクール
入選

文体が軟らかな表現の『ですます体』に変わりました。議会・行政用語はできるだけ使わない表現に努めています。



第72号 平成13年10月22日発行
第17回全国町村議会広報コンクール
奨励賞受賞

レイアウトが一新されました。議会の活性化の点で、一般質問も一問一答方式に変わりました。



第60号 平成10年10月22日発行
第14回全国町村議会広報コンクール
入選

架空の弥次議員と喜多議員の討論と、「あの質問はどうなった」という追跡形式を載せたのが、評価されました。



第54号 平成9年4月22日発行
第12回全国町村議会広報コンクール
入選

様々な課題を「町政を斬る」という形で、弥次議員と喜多議員の架空議員に登場してもらい、対談形式を特別企画として載せたことが評価されました。



第58号 平成10年4月22日発行
第13回全国
町村議会広報コンクール
入選

予算特別委員会の議論が集中したところを中心に載せたことや、紙面を緑色と白の二色にし見やすくしたところなどが、評価されました。

『議員による自主編集』



編集作業風景

100号によせて

読者の励ましにささげられて
当選した初年度から8年間、議会広報特別委員会に席を置き、47号から77号の編集に携わりました。

新人議員にとって、議会広報の編集は「力」をつける勉強の場でもありました。

編集にあたっては、「読みやすく、わかりやすく、親しまれる議会広報でありたい。わかりやすさと真実、公平な姿勢に徹し、議会の全体像を伝えたい。」と思いました。

議論のなかで、「町長の肉声を聞きたい。」と迫った議員のそんな緊迫感を紙面に現すことができたかは疑問です。

読者皆様の励ましに勇気を与えていただき職責を務めることができましたことに感謝しております。



衣袋捷二氏
(第6代 広報委員長)

100号によせて

紙面の充実を
議会だよりも、ただ発行すればいいという時代も過ぎ、どうしたら読んでもらえるか、議会活動に関心を持ってもらうか、当時、唯一の広報手段として責任は重大でした。

編集長の時、従来の紙面、表現を変えようと決意しました。変えるきっかけは、新潟県柿崎町の研修で、担当職員が「女性週刊誌を参考に分割付を行う」というひとことでした。内部批判をかわすため、議長の事前の承諾と全国コンクールの入賞は必須でした。

肝心なことは紙面の充実で、是々非々の姿勢で臨む議会活動しかなかった。



赤間隆文氏
(第5代 広報委員長)